



Title	浜渦辰二教授 功績調書
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2018, 49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71239
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

浜渦辰二教授 功績調書

浜渦辰二教授は、昭和51年3月に静岡大学人文学部を卒業後、九州大学大学院文学研究科修士課程に進学、昭和59年3月同博士課程を単位修得退学後、ドイツ学術交流会の奨学生として(旧)西ドイツ・ケルン大学およびヴッパータール大学に2年間留学、帰国後、西南学院大学等非常勤講師、九州大学文学部助手、静岡大学人文学部助教授を経て、平成7年に九州大学より博士(文学)の学位が授与された後、平成8年4月同教授に昇進、平成20年4月には大阪大学大学院文学研究科に着任、平成30年3月31日限り退職した。

同教授は、現代思想の源流の一つである現象学の創始者エドムント・フッサールの、とりわけその間主観性の現象学を研究の基盤に据えて、精力的に研究を続けてきた。博士論文に基づく著書『フッサール間主観性の現象学』(創文社)は、その出発点となったもので、「地平としての他者」という考えに注目したオリジナルな解釈を示したものとして、高く評価された。その後も、単訳のフッサール『デカルト的省察』(岩波文庫)、共同監訳のフッサール『間主観性の現象学 その方法』『間主観性の現象学Ⅱ その展開』『間主観性の現象学Ⅲ その行方』(ちくま学芸文庫)を発表し、日本におけるこの分野の研究を最先端で引っ張ってきた。退職を控えた時期に、これまでの研究の成果として、著書『可能性としてのフッサール現象学—他者とともに生きるために—』(晃洋書房)を刊行したことは、一貫した研究関心のありかを示すものとして評価できよう。

同教授は、静岡大学時代より、このような狭い意味での専門的研究と平行して、間主観性を論ずるための「人と人の間」の関係の具体的な場として、広い意味でのケアの問題にも取り組み、ケアの学際的研究を進めて編著書『〈ケアの人間学〉入門』(知泉書館)を出版するとともに、研究者と実践者との間の対話の場を公開市民シンポジウムとして企画・運営することにも尽力してきたが、大阪大学に着任してから、京都・神戸・大阪を結ぶ関西地区で、同様の活動を開始、展開してきた。これは、地域のなかでケアの文化を育てていくための活動として、医療・看護・介護・福祉関係者からも高い評価を得てきた。

同教授は、これも静岡大学時代から大阪大学時代へ続けて、精神科医や臨床心理士と哲学研究者の対話の場である「臨床哲学」の活動にも参加してきたが、これも上記の間主観性の現象学ともケアの人間学とも関連しており、これら一連の活動が評価されて、もう一つの「臨床哲学」、すなわち、「臨床」をより広く「社会という臨床」として展開している、大阪大学の「臨床哲学」専門分野に迎えられたものである。同教授は、現在日本にある二つの「臨床哲学」の活動に通じており、両者を比較しながら論じることができる貴重な存在となっている。

同教授のもう一つ目立った研究活動としては、ドイツ留学経験も踏まえて、早い時期からドイツ語と英語を駆使して、海外での研究発表や論文執筆により世界的なレベルの研究の発信を続けてきていることである。最終年度においても、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、台湾、中国、香港、韓国と6回の海外出張で10回の学会発表と講演をこなしてきており、今年度末には、これまで発表ないし執筆してきたドイツ語と英語の論文20本あまりを編集して、『大阪大学文学研究科紀要』のモノグラフ編(On Development from Husserl's Phenomenology - Between

Phenomenology of Intersubjectivity and Clinical Philosophy of Caring -) として刊行した。

一方、同教授は、学内においては、研究推進室の副室長・室長を精力的に勤めあげ、全学の公開講座委員を勤めて自らも講座の教壇に立ち、昨年度からは、国際連携室連携推進部門チーフとともにハイデルベルク大学との研究・教育交流プログラムの窓口を勤めている。また、大学からの推薦により、平成 21 年からの 3 年間、日本学術振興会学術システム研究センターのプログラムオフィサーとして、科研費審査員の選考等の作業に従事した。

また、教育に関しては、教育体制の整備に尽力し、卒論・修論中間発表会・最終発表会の制度を確立し、『卒論・修論要旨集』を発刊し、社会人入試で入学する大学院生の増加に貢献し、多くの大学院生の指導を行ってきて、10 年間に 13 本の博士論文の主査を務めた。「臨床哲学」講座主催の臨床哲学研究会とウェブジャーナル『臨床哲学』での院生の論文発表を促進するとともに、海外研究者の論文を院生と共訳で発表することにも貢献した。

他方、学外においては、日本哲学会、日本倫理学会、日本現象学会、日本現象学・社会科学会、日本生命倫理学会、西日本哲学会、中部哲学会、九州大学哲学会、静岡哲学会、フッサール研究会、「ケアの人間学」合同研究会、「ケアの臨床哲学」研究会などの各種学会・研究会で、編集委員、国際交流委員、理事、幹事、代表などを務めて、それぞれに多大な貢献をなした。また、そうした学会などで得た研究者仲間との繋がりを通じて、25 年間にわたってほとんど切れ目なく、日本学術振興会の科学研究補助金による共同研究をさまざまな形で継続してきたことは瞠目に値する。退職直前に刊行した編著書『北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす』（大阪大学出版会）も、同補助金の研究成果公開促進費を得たものである。

以上のように、同教授は研究の面では、間主観性の現象学、ケア論、臨床哲学といった分野で独自の視点から提言を行い、情報発信をたゆまず続け、本学においては教育活動、行政活動に精力的に携わり、学外にあっても国内外のさまざまな学会・研究会の発展に貢献を果たしてきた。平成 23 年度から 28 年度年度まで、6 年連続で大阪大学文学研究科「優れた教員」として表彰されたことは、研究・教育・行政にバランスよく活動を継続してきた証として特筆に値する。